



特集にあたって（〈特集Ⅰ〉自治体史編さんの現在2： 丹波篠山市史の取り組みと課題）

編集委員会

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:4-5

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505149>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505149>



特集Ⅰ

自治体史編さんの現在 2

——丹波篠山市史の取り組みと課題——

特集にあたって

編集委員会

いま自治体史編さんは大きな曲がり角にある。例えば、かつての史料編と通史編をそなえた自治体史は次第に姿を消し、「図説」と称される読み物風の自治体史が多く刊行されるようになった。

その理由を考えることはさして難しくない。かつてのようなスタイルの自治体史が、現在を生きる多くの人にとって、読んでみる気を起こさせる魅力的な本ではなくなってきたからである。本を作る自治体の側も、公金を投入して多くの人の関心を引かない本をつくる財政的、人的余裕はもうないだろう。

そう考えると、この変化はある意味起こるべくして起こったと言えるが、もちろん



写真 篠山城跡より望む高城山(八上城跡)



見過ごせない問題がないわけではない。その一つは、新しい自治体史が史料編を欠いている場合が少なくないことである。そこで本特集では、自治体史における史料の扱い、史料編の意味を問うことを通じて、現時点での自治体史編さんの課題と今後の展望について考えてみたいと思う。

史料編を欠いている新しい自治体史のなかには、過去に史料編を伴った自治体史を発刊しており、二回同じような史料編を作る必要はないという考えもあるだろう。しかし、史料を集める基準は時々の研究状況に規制されるから、研究状況が変われば、これまでとは違う史料が重要になってくる。また、旧自治体史編さん後に新しい史料が発見されることも十分に考えられる。不変の決定版のような史料編はないと考えるべきであろう。史料編も適宜アップデートされるべき書物なのである。

しかし一方で、史料が羅列された従来型の史料編は、自治体史と人々の間のバリアになっていないだろうか。少なくとも、史料編が多く市民の関心を自治体史に向けるように働いているとは思えない。研究する側の都合だけでなく、市民が史料に親しむ方策が、史料編とともにあれば、史料はバリアではなく、史料を通じて自治体史に興味を持ってもらうこともできるのではないだろうか。

特集では、現在編さんが進行中の『丹波篠山市史』に関わる古代、中世、近世、近代の担当者が、上記のような問題意識にもとづいて、史料編をどういう観点からアップデートするか、研究、調査の進展がどのような新しい史料を探り出したのか、史料と市民を結ぶ回路をどう構築するかといった課題を論じた。各時代ごとに事情が異なり、力点の置きようは必ずしも共通していないが、これからの自治体史史料編のあり方を模索するための糸口になれば幸いである。

(文責：市沢 哲)